
バカとテストと召喚獣 ～バカと未来と過去と Fクラス～

月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣　　くバカと未来と過去とFクラスく

【Nコード】

N5875X

【作者名】

月

【あらすじ】

主人公（らしき人物）、西崎瑠美は文月学園内で学力1位の實力をもつ人物。そして、昔から瑠美と仲がよかった吉井明久、姫路瑞希、渡辺直貴。

特に直貴は瑠美に続いて、学力2位の實力をもつ。

しかし、この二人。自分達も知らない過去をもつ人物でもあった。

仲のよい四人組はFクラスでどんな生活をおくっていくのか？

プロローグ（前書き）

はじめまして♪

バカテスの小説を書くのは始めてで戸惑うこともありますが、頑張
って執筆したいと思っています☆

プロローグ

文月学園

科学とオカルトと偶然というわけの分かんない理屈で生み出された試験召喚システムを取り入れた学校

進学校であると同時に最新技術の実験場としても知られるこの学園それ故に、多くのスポンサーが付いており学費は極めて安い

学園にまで続く坂道の両脇には新入生を迎えるための美しい桜が咲き誇っている

そんな坂道を、鼻歌を歌いながら歩いていく少女が一人いた。

Side 瑠美

「~~~~♪~~~~♪」

今年も桜がきれいだな〜♪

ここに入学してから二度目の春がきたんだな〜

今年も楽しい学園生活がおくれるといいな☆

そう思いながら、私、西崎瑠美は校門までスキップをしていた。

校門に到着すると、筋肉隆々とした体格のいい教師が立っていた。

えっと確かあの人は・・・

「鉄人先生。おはようございます♪」

「西崎・・・だよな？ ついにお前もそんなことを言うようになったか・・・」

「冗談です。西村先生、おはようございます」

「お前のは冗談に聞こえないんだが・・・、まあいい。ほら、受け取れ」

そう言って、てつじ——西村先生は私に茶色い封筒を渡した。
お？クラス分けの結果かな？

「それにしても西崎、残念だったな。あの時ちゃんとテストを受けていればAクラスだったんだがな」

「いやー、しょうがないですよ。ちゃんと自分の体調管理をしてなかったですもん。責任は自分にありますから」

「そうか」

「それに、来年もありますから☆その時にがんばりますよ☆」

「なるほど。お前らしい考えだな。先生も応援するぞ」

「ありがとうございます♪てつじ——西村先生」

「・・・西崎。いくらなんでも成績を下がらせるんじゃないぞ・・・」

「分かってますよ♪それぐらいは！」

そう言って鉄人の言葉を頭の中に入れておき、校舎の中へと入っていった。

向かうクラスは・・・・・・

西崎 瑠美

『Fクラス』

Fクラス！！！

五分後

Side 明久

やばい!!

新学期早々遅刻だ!!

そして急いで足を早くする僕。

校門近くになると、

「遅いぞ吉井、渡辺!!」

ドスのきいた声で、鉄人が遅刻してきた二人の名前を呼んだ。
ん?二人?

横をみると、あのテイ○ズオ○グレ○セスの主人公、ア○ベルに
た少年が僕と同じく息切れをしていた。

髪の色は焦げ茶色で、目の色は紫。

「明らかにア○ベルの色違いバージョンの少年だ。」

「おい、明久。声にでてるぞ」

「やあ。おはよう直貴。君も遅刻?」

「今、明らかにスルーをしたよな!」

「え?なんのこと?僕にはなんにも分からないよ」

「嘘付け!!」

「ええい。黙らんかきさまら!!」

鉄人の怒鳴り声で、僕たちの言い合いは終了した。

「全く貴様らは……………、言い合いの前に俺に言うことがある
だろ」

「あ、そうでしたね。おはようございます鉄人」

「おはよう西村」

「貴様らは遅刻の謝罪よりあいさつが大事、しかも教師の名前もろくに言えないとは何事だ!!!」

「おいおい、鉄人。俺はちゃんと西村っていったぜ」

いや、今鉄人っていったから。

「西村先生だ!!! 吉井は別名、渡辺は呼び捨てで呼んだらろ!!!
.....はあ.....、貴様らに言っても無駄だな.....。ほら、クラスわけの結果だ」

そう言っ、鉄人は僕たちに茶色い封筒を渡した。

「あ、どーもです」

「サンキュー」

「しかし、渡辺は居眠りさえしなければAクラスだったんだがな...」

「しょうがねえじゃん。前日緊張して眠れなくてつい寝ちゃったんだからよ」

それ、遠足に行くのが楽しみでなかなか眠れない小学生じゃん。

「明久。今お前、俺のこと遠足に行くのが楽しみでなかなか眠れない小学生だと思わなかったか？」

「気のせいじゃないかな？」

ちっ!!!

まさか心をよみとられるとは。油断した!!!

「ていうか俺、途中一回だけ起きたぜ」

「ああ。確か西崎さんが倒れたときだったっけ？」

「そうそう。それそれ……………って、なんでお前知ってんだよ」

「だって、保健室で会ったじゃん」

「……………そうだったか……………」

「話はもういいからさっさと自分のクラスを確認しろ」

「「はい」」

ん？

くっ、なかなかあけられない。

おもいつきのりがくつついている。

よし、気合いであけよう。

「そういえば吉井。今だから言うがな」

「ん？なんですか」

僕は封筒と戦いながら鉄人の話をきく。

「俺は去年お前を一年見て、もしかしたら吉井は『バカなんじゃないか』と疑いを抱いていたんだ」

「それは大いなる間違いですね。そんなことを言っているようじゃ、そのうち『節穴』という徒名がつきますよ」

僕はバカではない。

だって、振り分け試験はちゃんとできたもん。

「明久。現実を見ろ」

「何をいつているのさ直貴。僕は正気だよ？」

「はあ……………、お前というやつは……………」
「そういう、直貴はどこのクラスなんだよ」

こいつ。

僕が苦戦してるなか、楽そうに封筒を開けていやがった。

「あ？俺？ほら」

渡辺 直貴

『Fクラス』

「俺は居眠りしてたからな。全然、問題を解いていなかったからな」

……………なんか、ムカつくのはなぜだろう……………。

「まあ、とにかくだ。すまなかったな吉井お前を疑ってしまったて」
「分かればいいんですよ」

さすがに気合いでは開けられないか……………、じゃあ破くか。
そしてやつとのこと封筒を開けられた。
中に入っている紙を取りだし広げる。
書いてあったことは、

吉井 明久

『Fクラス』

「お前は疑いの余地もない、正真正銘の馬鹿だ！」

なんですとー！！！！！

「そんな、意外にイケたと思ったのに……」

「まあまあ明久。お前にしてはよくやった（笑）」

「直貴。絶対心の中で馬鹿にしているだろ!!」

「なんのことだ明久。俺は同情してあげただけだ」

「嘘だ!!!!!!」

「さて、クラスも分かったことだしとっとと行くぞ明久」

「さりげなくスルーされたし!! しかも、何事もなかったように歩き始めたし!! ちょ、待ってよ直貴!!!!」

そして僕達二人は校舎の中に入ってしまった。

はあ………………。

そうだとしてみかなり悔しい。

CかDクラスに入れたと思ったのに…………。

「残念だが明久。いくらFクラスに入んなくても、C、Dクラスには入れなかったと思うぞ」

「なぜ!!!!!! ていうか、なんで人の考えてることが分かるの!?!」

「お前の頭の悪さから、せいぜいE、Fクラスが限界だ」

「はつきり言われたああああ!!!!!!」

「お。ここがAクラスか」

「え?」

直貴の方を見ると、もはやホテルというしかない豪華な教室があった。

「すごい…………、ノートパソコンに個人エアコン、冷蔵庫にリクライニングシート。うらやましい……………」

「俺はなんとなく嫌だな…」

「なんで？」

「機械音痴だからだ」

「なっとくだよ……………」

「ということで、ここにいるとイライラしてくるから行くぞ」

「え？ちよっ、まっー！……！」

僕の言葉を聞かないで、直貴は僕を引きずっていった……………。

そして、B、C、Dクラスを通りすぎてEクラスを通りすぎようとする、目の前に、茶髪でお団子ヘア（しかし、後ろ髪を残しているしかも長め）の少女がいた。

あれは……………、

「おーい！！西崎さん！！！」

僕の声に反応して少女は振り返った。

「あ！明久に直貴！！！」

そして、笑顔でこっちにきた。

「おはよう二人とも♪」

「おはよう、西崎さん」

「よう。瑠美。体調はもう大丈夫なのか？」

「うん！！大丈夫！！あの時はありがとう！直貴☆」

そして、西崎さんは直貴に超かわいいスマイルを見せた。

「お、おう。気にするな……………（／／／／／／／／／／）」

くそっ!!

羨ましすぎるぞ直貴!!!

「それにしても明久、面白い格好だね。よくそんな状態でしゃべれるね」

え？

現在の僕の格好

直貴に引きずられていった体勢

つまり←

自力で後ろを向いている。

首がいたい。

「……………直貴。そろそろ離してよ」

「ああ、そういやそうだったな」

ふう……………。

やっと、普通にたてるようになった。

「そういや西崎さんもFクラスなの？」

「うん。途中退席は0点だからね」

「それじゃあ、早くいこうか」

「うん。後、昔みたく呼び捨てでいいよ。私も呼び捨てで呼んでるんだから」

「いや、でも……………」

「呼び捨てで呼ばなかったら……………分かってるよね？（黒笑）」

「（でた、瑠美の暗黒モード）」

「はiiiiiiii!!!!!!喜んで呼び捨てで呼ばさせていただきます!!

!!!!!!」

「明久。今の発言、変態がいうセリフにそっくりだったぞ」

「失礼な!!!!」

「ところで瑠美。Fクラスで大丈夫なのか？」

「うん♪なんか楽しそうだし♪それに……………」

そして、瑠美は僕のそばまでよってきた。

すると、僕の耳に爆弾発言をした。

「直貴もいるから嬉しいしね♪（／／／／／）」

こんな爆弾発言をしてから、瑠美は僕と目を合わせた。

爆弾発言をしたため、顔が赤い。

そんな瑠美に、僕はこんなことをいってあげた。

「応援してるよ。瑠美！」

「うん♪ありがとう明久♪」

「？」

二人で何を喋っていたのか、直貴は気になっていたのか頭に？マークを浮かべている。

「よし!!!じゃあ行こっか!!!」

「うん!!!レッツゴー!!!!!!」

「あ、おい待てよ!!!!!!」

いよいよ、僕達の高校二年生の生活が始まるんだ!!!!!!

プロローグ（後書き）

次回はオリキャラ紹介を行います

オリキャラ紹介（前書き）

オリキャラ紹介です

はっきり言って主人公が決まっています（泣）

オリキャラ紹介

西崎 瑠美 （にしぎるみ）

身長 160？

体重 瑠美に殴られたため不明

胸はFカップ

見た目 茶髪でお団子をしている。しかし後ろ髪を残しているしかも長め。

目の色はオレンジ色

趣味 体を動かす 音楽を聞く 料理

得意科目 数学 化学 古典 家庭

苦手科目 日本史 物理 国語

特技 水泳 空手 料理

詳細 明るい性格で、元気いっぱい少女
もちろんクラスの人気者

（学年の中で一番もてる）

試験中、途中退席したためFクラスになった。

美人だが意外にも空手が得意らしく、その実力は全国1位の實力。

そのため彼女を怒らせると痛い目にあう。

それでもなぜかもてる。明久、直貴、瑞希とは昔から知り合いで仲良し。

直貴のことが好きだが、なかなか想いが伝わらない。

友達のことを馬鹿にされるのが嫌い。

特に明久、直貴、瑞希の悪口をいうやつには容赦しない。

恥ずかしがりやな性格でもあり、ちょっぴり泣き虫なところと、怖がりなところがあるのでそこがもてるのかもしれない

得意科目の数学、化学、古典、家庭ではAクラス以上の実力だが、苦手科目のなかでも特に苦手な物理は10点。

召喚獣は、チャイナ服を短くした感じの服に雄二の召喚獣と同じく拳で戦う。

（拳の装備はゴールドアームズという物）

もちろん腕輪も持っているし、召喚獣にも特殊な効果がある。

腕輪 色はクリア

効果は『共鳴』シンクロ

相手の召喚獣の動き、次にする行動が分かるようになる。それに追加して、自分が言った攻撃名の攻撃をしてくれる。必殺技も可。

しかし、この時、召喚獣と一体化しているようになるので、召喚獣が受けたダメージは自分にもくる。（つまり観察処分者になる）消費点数は100点

召喚獣の特殊効果

発動キーワード

『スタイルチェンジ』

教科が変わった時に使える効果

使った時は、その教科の点数が倍になる。

ちなみに姿も変わる。

渡辺 わたなべなおき 直貴

身長 168?

体重 54?

見た目 テイルズオブグレイセスのアスベル

髪の色は焦げ茶色

目の色は紫

趣味 運動 寝る

特技 剣道 陸上

得意科目 国語 物理 化学 保健体育

苦手科目 数学 英語 家庭

詳細 強そうな体格だが、根は優しいやつ。

試験中、いねむりをしていたためFクラスになった。(しかもその理由が、前日に緊張しすぎて眠れなかったという、小学生なみの理由)

しかし、一回だけ起きている。

剣道が得意で、竹刀がなくても枝や定規などあればそこら辺の不良を一発で倒せるほどの実力

しかし機械音痴である

明久、瑞希、瑠美とは昔から知り合いで仲良し。この頃瑠美のことが気になって、なかなか顔を合わせられない
果たして瑠美の想いが伝わる時はくるのか？

雄二、明久と鉄人から逃げるのが得意(ていうか、最早達人級)

努力をしない人物が嫌い

後、瑠美を泣かせたらマジでキレル(後ろに魔王が登場するような感じ)

得意科目は全てAクラス以上

しかし、苦手科目のなかでも特に苦手な英語は10点

召喚獣は、見た目がアスベルにっているせいか、召喚獣自身もアスベルと同じ姿

もちろん、武器は剣

腕輪 色は金色

効果は『オーバーリミッツ』

相手の召喚獣の動きをとめ、一回だけ必殺技を決めることができる。

消費点数は200点

この状態の時は自分の召喚獣は光っている。なお、瑠美の召喚獣がいるときに発動すると合体攻撃ができる。

金沢 豊 （かねざわゆたか）

身長 170?

体重 58?

見た目 ボカロの鏡音レンのような髪型

色は茶髪

目の色は赤

趣味 音楽を聞く

特技 喧嘩 運動

得意科目 保健体育 数学 化学

苦手科目 国語 古典 日本史

詳細 美波と同じくドイツからきた帰国子女。

そのため、美波とは知り合いである。

正義感が強く、困ってる人はほっとけない性格

逆に友達を馬鹿にするやつには制裁をする

振り分け試験を受けていないためFクラス

美波とそこで再会している。

明久達とは美波の紹介で仲良くなる。

鉄人からはたまに追いかけられるので、その時は雄二達と素晴らしいコンビネーションを見せる。

得意科目はAクラス以上の実力

苦手科目でも、せいぜいDクラスなみ

召喚獣はガンマン

武器は二丁の銃。(装備は知っている人は知っている、マイソロ3のレイディアントの装備)

簡単に言えば、マントにサングラスにズボンに袖無しのTシャツ

腕輪 色はオレンジ

効果は『最終決闘』ラストバトル

自分の召喚獣が、戦死する直前に発動できる。

その時の点数を倍にしそのまま、その点数でやり直すことができる。
消費点数 時間がたっていくことに50点引かれていく

※この小説のオリキャラ達は、勝つ直前に必殺技の名前を言います
そこら辺は気にしないでください

オリキャラ紹介（後書き）

どうでしたか？

腕輪の能力がめっちゃくちゃですみませんでしたm
┐
└ m

もし、問題があればいつてください

では

第一話 暴言と紹介と登場（前書き）

バカテストは次回から行います

第一話 暴言と紹介と登場

S i d e 瑠美

わく……………。

これはひどいね。

現在、私と明久と直貴はFクラスの前で固まっています。

何故かって？

あまりにもボロいからだよ……………。

「これは意外だな……………」

「まさか、こんなに酷かったなんて……………」

「まあまあ明久、直貴。きっと教室の中では温かく迎えてくれるよ」

「だといいんだがな……………」

「もう、直貴ったら。それじゃあ私から入るよ」

そう言っ、私は教室に入っっていった。

「すみません。おそくなり…早く座れ。このウジ虫野郎……………
なっ!?!」えっ!?!」

入った瞬間、温かく迎えてくれる言葉ではなく暴言をはかれた。

「うっ……………うう……………(泣)」

「す、すまん!?! てっきり明久かと……………」「美女を泣かせるとは
いい度胸だあああああ!?!」なっ!?! ギャアアアアアアア
!?!?!」

私が泣いた瞬間、教壇の上にたっていた赤い髪でトゲトゲの髪型の男子は、黒いフードを被った人物達に襲われた。

「すみませーん。おそくなり……………って、瑠美どうしたの!?!」

「うえ……………あ、明久……………グスッ（泣）」

「ど、どうしたの!?!なんで泣いて……………」
「どうした? 明久……………」
「あ、それ僕のセリフ……………」

「うう……………直貴、明久……………私ってウジ虫野郎なの……………?（泣）」
「そんなことないよ!?! 瑠美は超美少女だよ!?!!」

「おい……………瑠美……………、それ誰に言われたんだ?」

「あの人……………」

そして、私は赤い髪の人をさした。

「よし、分かった。明久。瑠美を頼む」

「了解」

「ルミヲナカセタヤツコロス……………」

「お!?!そこにいるのは、直貴と明久か!?! 助けてくれ……………」
「って、直貴!?!なぜ、背後から魔王がでて来てるんだ!?!」

「ルミヲナカセタヤツコロス……………コロス……………コロス!?!!」

「ちょ、ちょっと待て!?!これにはわけが……………」
「シネエエエエエ……………」
「ギャアアアアアア……………」

「? ねえ、明久。なんで目隠しするの?」

「知らない方がいいよ瑠美。ていうか見ちゃダメだ」
「??!?」

明久の言っている言葉が、よく分からなかった。

Side 明久

あの後。直貴の魔王化は消えず、誰も止められなくて焦ったけど、先生がきて騒ぎはなくなった。

ちなみに直貴達にボコボコにされた雄二は、現在気絶中である。現在僕は自分の席に座っている。窓側で一番後ろの席が僕。その前が直貴。そのとなりが瑠美だ。

「おい雄二。生きてる？」

「ああ………なんとか………」

「ルミヲナカセタカラダ………」

「だから、あれには理由があるんだよ!!」

「あ、そうなの？」

あ、直貴の魔王化がおさまった。

「俺が間違っ、明久が入ってきたと勘違いして言っちゃったんだよ!!」

「なるほど。本来なら明久が言われるはずだったのか」

「ああ、そうだ」

「貴様あああああ!!」

僕はウジ虫野郎なんかじゃない!!!

「それにしても、この教室はひどいな……」

「そう? ちゃぶ台ってなんか和風じゃない？」

「いや、ちゃぶ台の事じゃない。この教室全体のことだ」

「そういえば、なんで雄二は教壇に立っていたの？」

「ああ。俺がこのクラスでトップだったから、先生がくるまで立っていたんだ」

「じゃあ、貴方が代表なんだね！！」

「お、おお。坂本雄二だ。よろしくな」

まあそりゃ慌てるよね。

瑠美の目は少女漫画に出てくるような目だから。

それに、噂では学年で一番の美女とか言われてるからね。

「えー、その四人。静かにしてください。ホームルームを始めます」

なんて四人で喋っていると、先生に注意された。

「皆さん。各自座布団とちゃぶ台はありますか？」

『先生ー。座布団に綿が入っていないんですけどー』

「我慢してください」

『先生ー。すきま風が寒いんですけどー』

「我慢してください」

『先生ー。ちゃぶ台の足が折れたんですけどー』

「それなら、このボンドを使って直してください」

.....

流石、最低クラス。

「それでは、自己紹介でもしますかね。えー、では、廊下側の人からお願いします」

すると、廊下側の席の一人が立ち上がった。
あれは………

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

やっぱり!!

瑠美の次に美少女という美少女の秀吉だ!!

ああやって、男の制服を着ているけど実は女の子なんだ!!!!

「おい!!!! 明久!!!! なんで女子が男子の制服を着てるんだよ!!
」

ほら!!!! 直貴も、目を疑わせてるよ!!!!

「お主!!!! ワシは男じゃぞ!?!」

『秀・吉!!!! i love you!!!!』

「だから、ワシは男じゃああああああ!!!!!!」

クラスのみんなが秀吉にラブコールをおくっているなか、秀吉は必死に叫んでいた。

「可愛い♪お人形にしたいくらい♪」

『なに!?!』

瑠美の一言にクラス全員が固まった。

「と、とにかくわしは男じゃ!!!!」

と言いながら秀吉は座った。

「……土屋康太……」

この静かな声はムツツリーニ……！
相変わらず無口だな

「…趣味はとうさ……何でもない……」

そして、性格も相変わらずだな。

「……………です。よろしく」

どんどん、紹介が終わっていく。
次に立った人は女子だ。

あの人も見たことがあるな…、確か……………

「島田美波です♪海外育ちで日本語は会話ならできますが、よみか
きは苦手です。あ、英語も苦手です。育ちがドイツなので。趣味は
……………」

やっぱし島田さんだ。

なんかFクラスは、知り合いが多いな。

「趣味は金沢豊をボコることです☆」

「おい、ちよつとまで美波……！！殴るならまだしも、ボコるは酷
すぎるだろ……！！」

そして、全員性格が変わってない。

あれ？でも、今の男子は見たことないな……………。
島田さんの知り合いかな？

「たく……………。金沢豊だ。美波と同じくドイツ育ちだ。日本語は別に苦手ではないし、英語も苦手じゃない。今年から、ここに通うことになった。ちなみに、美波とはおさ馴染みだ」

チャッ↑一部の男子がカッターナイフを出すおと

「あ、そうそう。喧嘩なら堂々とこいよ？全員、病院送りにしてやるからよ」

サッ↑一部の男子がカッターナイフをしまうおと

へへ。島田さんと同じドイツ育ちなのか。

後で話しかけてみよう

そしてどんどん紹介が進んでいき、次は僕の番となった。

「えっと吉井明久です。ダーリンってよんでね☆」

『ダーリイイイイイイイイン！！！！！！！！』

「失礼。忘れてください」

「バカ……………」

今のは忘れよう。

次は直貴の番だ。

「よしっ。次は俺だな」

「失敗しないようにね。直貴」

「自己紹介で、失敗する馬鹿はいねえよ……………」

そう言って直貴は教壇の方に向かった。

「渡辺直貴だ。よく、テ○ルズオブグレ○○○の主人公に似てると

言われるんだが気にしないでくれ。剣道が得意で、もし明久や瑠美にてを出したら………ヨウシヤナククロス………」

ヤバイ!!!! また魔王化した!!!!

『ま、魔王!?!』

もちろん、突如魔王化した直貴にびっくりするクラスメイト達。
とそこへ

「な〜に。自己紹介でクラスメイトを脅かしてんのよ、このバカ直貴!!!!!!」

ドガッ!!!!!!

「グハッ!!!!!!」

ドサッ!!!!!! ↑直貴が倒れるおと

瑠美がいち早く、直貴に鉄斎を下した。
そして、自分の紹介をした。

「え〜と。さっきはこの直貴が脅かしてごめんね。私は西崎瑠美!
! 趣味は音楽を聞くことと、運動をすること!!!!!! これからよろしくね☆」

『可愛い!!!!!!』

「ほにゃ!?!」

瑠美の満面の笑顔で、クラス全員が心をうたれた。

「あ、そういえばいい忘れたけど。直貴と明久とは昔から仲良しなんだ♪特に直貴とは一番仲がいいよ♪」

「あのなあ、瑠美。わざわざそんなこという必要なんか……………」
「……って、あぶね……………」

ん？

うわっ……………！危な……………！！

「な、なんかカッターナイフが飛んできた……………！！」

『次は逃さん……………！！』

『この二人に死を……………！！』

ちよ、ちよ。危険だよこれ……………！！

「な、直貴……………！！何とかしてよ……………！！」

「何とかしてほしいなら、俺のちゃぶ台の上にある木刀をとってくれ……………！！」

こ、これ……………！？

ていうか、学校に木刀なんか持ってきていいの……………！？

「明久……………！！早くしろ……………！！」

「え……………！？あ、は、はい……………！！」

僕は、勢いよく木刀を直貴の方に投げつける。

パシッ……………！！↑直貴が木刀を受けとる

「おし……………！！いくぜ……………！！」

『シネエエエエエ……………！！』

クラスメイトが一気に直貴の方へ向かっていった。
直貴が木刀を構える。

すると、

「あ、そうそう。私、友達を傷つける人は嫌いなんだ☆特に直貴と明久を傷つける人は」

『みんな、席につけ!!!』

『ラジャー!!!!!!』

瑠美の一言で、襲いかかってきたクラスメイトは全員座った。

「うふふ♪おもしろーい♪」

「男子で遊ぶなよ……………」

「いいじゃん別に。あ、みんな!!!仲良くしようね!!!!!!」

『瑠・美!!!! i love you!!!!!!』

すごい。秀吉以上のラブコールだよ。

そして、瑠美と直貴が席についた瞬間

ガラガラガラガラガラ

教室のドアがあいた。

「あの…遅れてすみません」

『え?』

登場した人物に、クラス全員が驚いた。

「ちようどよかったです。姫路さん。今自己紹介中なので、姫路さ

んも自己紹介をしてください」

「あ、はい。姫路瑞希です。よ、よろしくお願いします!!!」

登場した人物は、普通このクラスにいない人物。

姫路瑞希さんだった………………。。

第二話 再会と理由とガールズトーク（前書き）

今回からバカテストを入れました♪
ではどうぞー！！

第二話 再会と理由とガールズトーク

バカテスト 化学

第1問

【調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例をひとつ挙げなさい。】

姫路瑞希・西崎瑠美・金沢豊の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんと西崎さんと金沢君は引っ掛かりませんでしたね

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

渡辺直貴の答え

『合金の例……ゴールドアームズ』

教師のコメント

それは西崎さんの召喚獣の装備です。

しかし君は化学が得意と聞きましたが、本当に得意なんですか？

Side 瑠美

嘘……………。

瑞希……？なんでここに……………。

「はい！！質問です！！！」

「あ、はい。なんででしょうか」

と思っていると瑞希は誰かに質問された。
いきなりの質問にちよつとパニックっている。

「どうしてここにいるんですか？」

.....。
もうちょつと言い方を考えようよ……。

「あの、えっと……。テスト中高熱をだしてしまっただんです……
……」

そういえばそうだった。

瑞希は高熱をだしたんだった。

「西崎さんと渡辺君にも質問です!! どうして君達もここにいるんですか?」

「えっと、私も急に倒れて途中退席になったの………」

「俺は居眠りをしていて0点になったんだ」

やっぱり、直貴の理由は小学生並だよ……。

『そういや俺も熱（の問題）がでてFクラスに』

『ああ、化学のだろ? あれは難しかったよな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出しきれなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

すごい……。 （逆の意味で）。

どうやったら、そんなこと言えるんだろ。

「で、ではっ、一年間よろしく願いますっ!」

そんななか、逃げるように瑞希は明久と雄二の隣の空いているちゃぶ台に着こうとした。

「き、緊張しましたあゝ……」

席に着くや否や、安堵の息を吐いた。

すると、明久が声をかけようとした。

頑張れ明久！！！！

「あのさ、姫——「姫路」あっ……………」

残念ながら、明久の声にかぶせるように雄二が声をかけた。
残念明久！！！！

「は、はいっ。何ですか？えーっと……………」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「「「あ、それは私も（僕も）（俺も）気になる」」」

気になっていた言葉を発すると、見事に直貴と明久と私の声が重なった。

どうやら、直貴と明久も同じことを思っていたらしい。

「あ、明久くんは直貴くんは瑠美ちゃん！？」

私達三人の登場で、瑞希はチョーびっくりしていた。

うーん。そんなに驚かなくてもいいんだけど………………。
ていうか、明久はショックを受けてるし。
すると、

「あゝ、姫路（瑞希）。明久がブサイクですまん」

その明久に止めを指すような言葉を、雄二と直貴がいった。
ていうか、直貴……………。

「雄二はともかく、なんで直貴まで!？」

「すまん。明久。つい本音が」

「直貴……………」

「ん？なんだ瑠美」

「……………見損なった…」

「なっ!？」（□———!）↑ショックになっている

うん。本当に見損なったよ直貴……………。
しかし

「そ、そんな!目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ!その、むしろ……………」

その一言で明久はショックから立ち直った。

立ち直り速!!!

「そう言えば、俺の知人にも明久に興味を持っているやつがいたよ
うな……………」

へへ。

明久って、いろんなところでモテてるんだねへ。

「え?それは誰———」

「そ、それって誰ですかっ!？」

「瑞希。落ち着いて」

「確か、久保——」

ん？

何か嫌な予感……………

「——利光だったかな」

……………。

えっと、まとめると……………、

久保利光 （性別／♂）

←

結果 BL

だよね……………。

あ、明久がさっきよりショック受けてる。

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」

「僕もうお婿にいけない……」

「大丈夫だよ。私がもらうから♪」

「「「ええ!?!」」」

「なにっ!?!」

「な!?!? 瑠美何てことを!?!? ていうか、みんな!?!? カッターナイフをおろして!?!?!」

『全員突撃!?!?!』

『おお——!?!?!?!?!?!?!?!』

「ちょ!?!?!?! 直貴助け——!?!?!?! つて、直貴!?!? なんで木刀を構えてるの!?!?」

「アキヒサ……………イクラシンユウデモユルサン!?!?!?!」

「ここじゃ話しにくいから、廊下で」
「別に構わんが」

明久が雄二と一緒に廊下に出ていった。
直貴はいいのかな？と思って隣を見ると……、

「……………いない」

いつの間にか消えていた。
どこにいったんだろう？

「あの、瑠美ちゃん！」

と思っていると瑞希から声をかけられた。

「ん？どうしたの瑞希？」

「あの、話したいことがあるんですけど……………」

「なんの？」

「ちょっと、ここじゃ話しにくいんですが……………」

「小声で話せば大丈夫だよ」

「そうですか？それじゃあここでいいです」

「んで？話したいことって？」

「あの……………、瑠美ちゃんは明久くんのことをどう思っているんですか？」

「へ？」

流石にびっくりしたので口をパカッと開けた。

「どうって……………、友達と見てるけど……………」

「そ、その。異性として見てませんか？」

「うん」

「そ、そうですか」

ピン♪

なるほど。だから瑞希は私に聞いたんだね。

「安心して瑞希」

「え？」

「私が異性として見てるのは、明久じゃなくと直貴だから♪」

「え、え？」

「だから、瑞希の恋が実ることを応援するよ♪」

「る、瑠美ちゃん！？べ、別に私は「好きなんですよ？明久のこと」
うっ、は…はい……………（／／／／／／／／／／）」

「だったら頑張らなくちゃね♪お互い頑張ろう♪」

「は、はい！」

意外……………。

まさか瑞希が明久に好意を抱いてたなんて……………。これは応援
しなくちゃね♪

「あの。瑠美ちゃん……、実はお願いが……」

「ん？なにになに？」

「わ、私に料理を教えてくださいー！！」

「え？料理？」

「は、はい……………」

「なんで急に……………あっ」

思い出した。

瑞希は料理がドヘタなんだ。

砂糖と塩の分量を間違えたり、毒物をいれたりとかくドヘタだっ

たんだ…………。

そのせいで直貴が中学の頃、魘されながら病院に入院してたっけ。流石に今年も犠牲者を出すわけにはいかない……………！！！！！！

「いいよ」

「ほ、本当ですか！？ありがとうございます……！！！」

「その代わり、私が許可したときしか料理をすること禁止ね……！！」

「そ、それぐらいお安いご用です……！！！」

「おし……！！料理に慣れるまで教えてあげるからね……！！」

「はい……！！」

もう高校生なんだから、料理ぐらいちゃんと出来るようにしなくちゃね。

Side 明久

「んで。話ってなんだ？」

「このクラスの設備のことなんだけど……」

「ああ。想像以上にひでえな」

「Aクラスの設備見た？」

「ああ。最早教室とは言えないほど、豪華だったな」

「そこで提案なんだけど、Aクラス相手に試召戦争をしてみない？」

「……………何が目的だ？」

「いや……。僕はただ、あまりにもこのクラスの設備が「おいおい。嘘つくなよ明久」な、直貴……？」

「お前は瑞希のためにAクラスに試召戦争をやろうとしてんだろ？バレバレだぜ」

「うっ……………」

「顔に出てるからな」

「雄二まで……………」

うう……………。

二人とも敏感すぎたよ……………。

直貴はともかく、雄二までにバレるなんて……………。

「まあいいだろ。ちょうど俺もそうしようとしていたからな」

「え？雄二も？」

「ああ。でも、本当にいいんだな明久」

「もちろん！！！」

「後、直貴と……………そこにいるお前もな」

「え？」

「は？」

なにいつてんの雄二。

誰もいないじゃないか。

「出てこいよ。確か……………、金沢豊だったかな？」

すると、なぜか天井からボカ〇の鏡〇〇〇の髪型にそっくりな男の子が落ちてきた。

あれ？確か、この人もFクラスだったような……………。

「よく分かったな。俺が天井に潜んでるなんて」

「俺達が出ていく前に、お前が出ていくのを見たからな。もしかしたらと思って言ったんだ」

「ほく。流石だな。まあ俺もAクラスに試召戦争を仕掛ける提案はいいと思うぜ」

「よし。決定だな」

「明久。後悔だけはするなよ」

「そうだぜ。明久」

「ありがとう……。雄二、直貴、豊くん」

「あ、俺のことは呼び捨てでいいぜ」

「そう？じゃあ、遠慮なく呼ばせてもらうよ」

「お。先生が戻ってきたな。教室に戻るぞ」

第三話 宣戦布告とお昼と始まり

バカテスト 国語

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 【(1) 得意なことでも失敗してしまうこと
(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え】

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
『(2) 泣きっ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にもありますがそれは渡辺くんが答えてくれました。

渡辺直貴の答え

- 『(1) 河童の川流れ』
『(2) 踏んだり蹴ったり』

教師のコメント

正解です。これが君の実力ということでしょうか？

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2) 泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント
君は鬼ですか。

金沢豊の答え

『(2) 瑠美に浮気がばれボコボコにされる直貴』

教師のコメント

最早それは教師のてにはおけません

西崎瑠美の答え

『(2) かかとおとしをやり過ぎて捻挫しました』

教師のコメント

それは渡辺くんをボコボコにするときにしたのですか？それとも岩を壊していた時にしたのですか？

Side 瑠美

私と瑞希のガールズトークが終わった瞬間、明久達が戻ってきて、替えの教卓をとってきた先生も戻ってきた。

まあ、どうせボロいしまた壊れると思うけどね。

「では自己紹介の続きをお願いします」

「えー、須川亮です。趣味は————」

また自己紹介が再開して、どんどん流れていく。
そして遂に、最後の雄二に回ってきた。

「それでは、最後は代表の坂本君に閉めてもらいましょう。坂本君前へ」

「はいはいっと」

先生に呼ばれ雄二は教壇の上にたった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

やっぱり代表の人って、ハキハキしているからいいよね。

「さて、皆に一つ聞きたい」

そう言って、雄二は全員の目を見るように告げる。

「かび臭い教室。古く汚れた座布団。薄汚れた卓袱台」

みんな雄二の視線を追い、それらの備品を順番に眺めていった。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが————」

一呼吸おいて静かに告げた。

「————不満はないか？」

『『『大ありじゃあつ!!!!!!!!!!!!!!』』』

ここでクラス全員の声が重なった。
最早魂の叫びだね（汗）

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ！！！！』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる！』

やっぱりみんな不満なんだ。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

雄二は自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、こうつけた。

「これは代表としてね提案だが——FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

S i d e 直貴

Aクラスへの宣戦布告。

これは、明久が考えたことだ。

もちろん、このFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えないだろ。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

『西崎さん。結婚して』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がった。
ていうか誰だ、瑠美に告白したやつ。

「みんな!! 最初から諦めちゃダメ!! 後、今告白した人は嫌い!!」

『『』どうもすみませんでした!!!!!!!!』』』

なんだ、こいつら……………。

「確かに無理があるが、勝つことができる要素があるんだ。今から説明してやる」

勝つことができる要素?
なんだそりゃ。

「おい、康太。畳に顔をつけて西崎のスカートを覗いていないで前にこい」

「……………!! (ブンブン)」

「え? わっ!!!!」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太と呼ばれた男子生徒。

ていうか、瑠美のスカートをのぞいただと?

よし後で詳しく聞か……………。

しかも、今頃気づいたのかよ瑠美……………。

珍しいなあいつが今頃気づくなんて。

んで康太とか言うやつは、顔についた畳の後を隠しながら壇上へと歩き出した。

なんか、Fクラスって個性的なやつがいっぱいいるな。

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性識者だ」
ムツツリーニ
「……………!! (ブンブン)」

ムツツリーニ? そういや聞いたことがあるな。男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以て挙げられているやつか?

『ムツツリーニだと……………?』

『馬鹿な、やつがそうだというのか…………?』

『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ…………』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……………』

「そして、姫路瑞希もいる。皆だって姫路の力によく知っているはずだ」

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスにもひけをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

なんかさっきから、姫路にもラブコールをおくっているやつがいるな。

「木下秀吉だっている」

『おお……………!!』

『ああ。アイツ確か、木下優子の…………』

「そして、西崎瑠美と渡辺直貴もいる。この二人は学園でトップの成績をもつ二人だ」

『そうだ……………!! 俺たちには西崎さんと渡辺がいるじゃないか……………!!』

『西崎さん……………!! 結婚して……………!!』

『いや。俺と結婚して!!!!!!』

そういえば、確か俺と瑠美は学園で1位と2位を争う実力だ、って聞いたな。

その前に今瑠美に告白したやつ殺す……………。

「そして金沢豊もいる。金沢はAクラスより上の実力をもつ男だ。振り分け試験の時はまだドイツにいたらしいから、振り分け試験をうけられなかったそうだ」

『なに！？そんなに頭がいいだ！？？』

『流石、帰国子女は違うな!!!!!!』

いや。それは関係ないと思うんだが……………。

「当然。俺も全力をつくす」

『確かになんだかやってくれそうなやつだ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『このFクラスには実力はAクラスレベルが五人いるってことだな!!!!!!』

いつきに教室内はいけそうだ、やれそうだという雰囲気になった。しかし

「それに、吉井明久だっている」

……………シン—————

士気が上がっていったのに、この一言で一気に下がっていった。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

「こいつは学園始まって以来最初の『観察処分者』だ！」

『……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、違うよ！ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！！！」

すまん明久。俺もそう思ってしまった。

「あの、それってどういうものなんですか？」

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類いの雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

「そうなんですか？それって凄いですね！」

「だが、実際は役に立たない雑魚だ」

「雄二！そこはフォローしてくれていいよね！？」

『やっぱり。観察処分者ってただ単の雑魚なんだな』

『それにどうせ、吉井はバカなんだろ？いなくたって平気じゃないか』

「でも、試験召喚獣って見た目と違って力持ちだから、運よく使うと便利なものだよ♪」

お。瑠美がフォローをいれた。

『西崎さんが言うならそのとおりだよな！！』

『流石西崎さん！！！！』

ほんとになんだこいつら……………。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う。そしてこのバカ（明久）にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事死んでこい！！！」

最低の一言だなおい。

「やだよ！！！！せめて、直貴ついてきてよ！！！」

「残念だが、敵に直貴がいることをバレることになら駄目だ。もちろん瑠美もな」

「それじゃあ、俺がついてってやろうか？」

「え？ 豊が？」

「まあ。金沢なら大丈夫だろ。金沢のことを知っているのは俺達だけだからな」

「と言うことだ。行こうぜ明久」

「あ、うん」

「よし。皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆^{ペン}を執れ！ 出陣の準備だ！」

『おおー！ー！ー！！！！』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！！ システムデスクだ！！！！！」

『うおおー！ー！ー！！！！』

「お、おー……………」

「楽しそう♪ 久しぶりにやりがいがあるね♪」

「おいまて瑠美。これは殺しあいじゃないからな？」

「分かってるよ♪ そんぐらい」

嘘つけ……………。

数分後。

Dクラスに宣戦布告にしにいった明久と豊が戻ってきた。話によると、襲いかかってきたので豊が制裁したらしい。微妙に雄二が悔しがっていたのは気のせいかな？

Side 明久

「さて。それじゃあミーティングを行うか」

僕たちは今、昼食とミーティングをするために屋上へと向かっている。

ちらっと後ろを見ると、

「……………（サスサス）」

ムツツリーニが自分の頬の辺りをさすっていた。

「ムツツリーニ。覗いていた時の畳のあとならもう消えてるよ？」

「……………！！！！（ブンブン）」

「いや、今更否定されても、ムツツリーニがHなのは知ってるから」

「……………！！（ブンブン）」

「ここまでバレているのに否定し続けるなんて、ある意味凄いなと思う」

「……………！！（ブンブン）」

「……………何色だった？」

「白」

即答か。

「やっぱりムツツリーニは色々な意味で凄いよ」

「……………!!（ブンブン）」

「おい。お前ら早くこい」

そんな話をしていたら、直貴に呼ばれた。

「あ、うん」

「……………（スタスタ）」

「あ、後明久」

「ん？」

「テメエ、アトデブツコロス」

「なんで!？」

なぜか直貴に死の宣告をされた後、雄二が勢いよく屋上の扉を開いた。

「さて明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたよ」

「じゃあ、まずはお昼御飯が先ね」

「明久。今日ぐらいまともな食べ物食べろよ」

「そう思うなら、パンぐらいおごってよ」

「え？吉井くんって、お昼食べない人なんですか？」

「いや。一応食べてるよ」

「……………あれは食べていると言えるのか？」

「何が言いたいのかさ」

「いや、お前の主食って——水と塩だろう？」

「失礼な!!きちんと砂糖だって食べているさ!……!!」

「明久……………。それは食べるとは言わないぜ……………」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

見ないで!!!! そんな妙に優しい目で僕を見ないで!!!!!!

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りがないんだよ!!!!」

「へへ。明久って一人暮らしなんだ」

「うん。両親が仕事の都合で海外にいるからね」

「ていうか。お前よくそんなんで生きていけたよな」

直貴の言葉が僕の心に、グサツと刺さったような気がする。

「……………あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

「え? いいの? 姫路さん」

「はい。明日のお昼でよければ」

やった!!!! 姫路さんの手作り弁当!!!! 楽しみだな。

「あ、ちょっと待って!!!! 私も作ってくるよ!!!!」

「え? 瑠美も?」

「うん。瑞希と共同でね♪いいでしょ? 瑞希」

「あ、はい」

え? ということは、姫路さんと瑠美が作ったお弁当が食べられるんだよね?

こんな幸せなこと滅多にないよ!!!!

「あ、そうそう。みんなにも作ってくるよ!!!!」

「マジか!?!」

「ラッキーだな」

「楽しみじゃの」

「……………（コクコク）」

「お手並み拝見ってことね」

「あれ？直貴。なんで震えてんの？」

「……………（ガタガタブルブル）」

「（安心して直貴。なるべくあんたには、あたしの弁当を食べさせるから。ていうか、皆を犠牲にはしないから）」

「（そ、それなら安心だな……………）」

？

二人で小声で何喋ってんだろ。

「さて。試召戦争の話に戻るぞ」

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？段階を踏んでいくならEクラスじやろうし、勝負に出るならAクラスじやろう？」

「そういえば、確かにそうね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

「どんな考えなの？」

「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？でも、僕らよりはクラスが上だよ」

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれないな。けど、実際のところは違う。オマエのまわりにいる^{メンツ}面子をよく見てみる」

「えーっと……………」

雄二に言われたとおりその場にいるメンバーを見回してみる。ふむふむ、この場には、

「天使一人と美少女二人と美男子二人と馬鹿が二人とムツツリが一

人いるね」

「天使って誰ですか!!! 吉井くん!!!!!!」

「!」「誰が美少女だ?!?!」

「姫路さん落ち着いて!!!!!! ていうか、なんで直貴と雄二と豊が美少女で反応するの!?!」

「私は女子なのに美男子扱いか……」

「…………… (ポツ)」

「瑠美とムツツリーニまで!?! どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない!!!」

「まあまあ、落ち着くのじゃ皆の衆」

とそこで、美少女秀吉が止めにはいった。まあ、男なんだけどね。

「そ、そうだな」

「全く、明久が変なこと言うから……………」

「そうだそ、明久」

「いや、僕のせいじゃないから!!!!!! だいたい美少女のところで反応する三人が悪いんでしょ!!!!!!」

「ま、要するにだ」

コホン、と咳払いをして雄二が説明を再開する。

無視!?! 僕の言葉は無視なの!?!

「姫路、西崎、渡辺、金沢に問題のない今、正面からやりあってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

「? それならDクラスとは正面からぶつかるど厳しいの?」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ? それ

に、さっきいいかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」
「あ、あの！」

「ん？どうした姫路」

「えっと、その。さっきいいかけた、って……吉井さんと坂本くんは、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて——」

「それはそうと！」

あ、危ない！！！！

あやうく言われるところだった。

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

「随分と余裕なんだね……。そこも代表の考えてことかな？」

「ああ。お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

「協力？」

「いいか、お前ら。うちのクラスは——最強だ」

……。なぜか、雄二の言葉が本当になるような気がしてきた。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………（グッ）」

「が、頑張ります」

「おっしゃ！やるぜ！！」

「本気をだすか……………」

「やるなら派手にやっちゃうよ！！！！」

打倒Aクラス。

みんな多分、そう思っていることだろう。

「そうか。それじゃあ、作戦を説明しよう」

大丈夫。僕達ならいける!!!! 僕たちは最強なんだ!!!!

第三話 宣戦布告とお昼と始まり（後書き）

次回、いよいよDクラス戦です!!

第四話 Dクラス戦 その1

バカテスト 物理

問 【以下の文章の（ ）に正しい言葉をいれなさい】
『光は波であって（ ）である』

姫路瑞希・渡辺直貴の答え
『粒子』

教師のコメント
よくできました。

このごろ渡辺くんの真面目な解答を見ると、なぜか西崎さんの真面目な解答が見られないのですが……………、どうしてなのでしょう？

直貴のコメント
さあ？

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
先生もRPGは好きです。

金沢豊の答え

『希望』

教師のコメント

正解ではないですが、先生はこの解答はすきです

西崎瑠美の答え

『ストロボナイツ』

教師のコメント

誰も初〇ミ〇の歌を答えなさいとはいってません
そういえば今思い出しましたが、西崎さんは物理が苦手でしたね。

S i d e 明久

「吉井！木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入った
わよ！」

ポニーテールを揺らしながら駆けてきたのは同じ部隊に配属された
島田さん。こうして改めてみると、背は高くて脚も綺麗なのに、ど
こか女性としての魅力に欠ける。一体何が足りないんだろう。

「ああ、胸か」

「アンタの指を折るわ。小指から順に、全部綺麗に」

ヤバイ。何か作動したっぽい。

「そ、それよりホラ、試召戦争に集中しないと！」
「それもそうね」

ちなみに今はどんな感じかな？
耳をすませると……………、

『さあ来い！この負け犬が！』

『て、鉄人！？い、嫌だ！補習室は嫌だああ！！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たつぷりと指導してやるからな』

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐えきれぬ気がしない！』

『拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立てあげてやろう』

『お、鬼だ！誰か、助けっ——————イヤアア——————（ボタン、ガチャ）』

よし、試召戦争の雰囲気はだいたいわかった。

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

「ん、なに？作戦？何て伝えんの？」

「総員退避！！！！」

「この意気地無し！！！」

ギアアアアア！！！！！！

殴られたああ！！！！しかもチョキでえええ！！！！！！

「目が、目があっ！！！」

「目をさましなさい、このバカ！アンタは部隊長でしょう！臆病風に吹かれてどうするのよ！」

「そういった台詞は、せめてグーかパーで殴ったあとに言って!!！」

「いい、吉井？ウチラの役割は木下の前線部隊の援護でしょう？アイツラが戦闘で消耗した点数を補給する間、ウチラが前線を維持する。その重要な役割を担っているウチラが逃げ出したりしたら、アイツラは補給ができないじゃない！」

「島田さん!!君はなんて男らしいんだ!!なぜだか涙が止まらないよ!!（後、激痛も）」

「ウチは女よ!!!!」

「さあ、島田さん!!やるぞ!!!!」

「無視するな吉井!!!!」

すると、島田さんのところに報告係がやってきた。

「島田、前線部隊が後退を開始したぞ！」

「総員退避よ」

「島田さん!?!さっきと言ってることが全然違うよ!!!!」

「ウチラにはもう無理なのよ。でも、精一杯努力はしたから平気よ」

「よし、分かった。逃げよう。僕らには荷が重すぎた」

くるとFクラスに向かって方向転換。

すると、本陣（Fクラス）に配置されてるはずのクラスメイトがいた。

えっと、確か横田くんだったけ？

「ん？横田じゃない。どうしたの？」

「代表より伝令があります」

そういつて横田くんは、メモを広げてこう言った。

「『逃げたらクロス』」

「全員突撃しろおーーーーっ!!!!!!!!!!」

「ちよっ、吉井!？」

すまない島田さん。

殺されるのは嫌なんだ!!!!

すると、前方からこちらに美少女（秀吉）が走ってきた。

「明久!!!! いま、お主美少女とかいてワシと見たじやろ!!!!!!!!!!」

「何をいつているのさ秀吉!!!! それは作者の仕業だよ!!!! とりあえず、秀吉自身は大丈夫なの?」「くっ……………、なんかスツキリしないがまあよい。戦死は免れておるが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったわい。召喚獣もヘロヘロじゃ」

「そっか。それなら早く戻ってテストを受け直してこないと」

「それもそうじゃな。では、1、2教科ぐらいはうけてくるようにしようかの。その間に頼んだぞい明久」

「任せて!!!!!!」

そして秀吉は回復試験をうけにいった。

秀吉と入れ違いに、島田さんがこちらに来た。

「吉井!!!! 試験召喚戦争のルールは覚えてる!? 立会いの先生がいなくちゃ、召喚獣を呼び出すことはできないんだからね!!!!!!」

「分かってるよ!!!!!!」

「ホントに!? アンタのことだから忘れてると思ったわ!!!!!!」

なんと失礼な!!!!!!

僕だってそれぐらい分かってるよ!!!!!!
え?

それなら試験召喚戦争のルールを全て言えって?

それは作者が書くのめんどくさいらしいから、詳しくは『バカとテストと召喚獣』を呼んで……!!

「吉井……!! 見て……!!」

島田さんが指を指した方を見る。

「五十嵐先生に布施先生……!! Dクラスの奴ら、化学で勝負をしてくるきだな……!!」

うん。化学は自信ないんだよね。

「島田さん。化学の点数はどのくらい？」

「60点台が普通よ」

さすがFクラス。ひどいなあ。まあ、僕が言う台詞ではないんだけどね。

「よし。じゃああそこは避けて学年主任の高橋先生のところにいこう」

「了解！」

そして、僕たちはこそそと気づかれないようにその場を離れる。なんか泥棒みたいだな。

「あ……!! そこにいるのはもしかしてFクラスの美波お姉さま……!! 布施先生こちらに来てください……!!」

「げっ……!! 美春……!？」

「しまった……!! 布施先生がこっちに来る……!!」

このままじゃ、二人とも補習室行きだ!!!
仕方ない!!!!

「島田さん!!!ここは君に任せて僕は先にいく!!!」

「ええ!?普通、逆でしょ!?」

「そんな台詞僕は知らない!!!!!!」

「えええ!?」

「じゃあ、後はよろしく!!!」

島田さんが快く(?)承認してくれたので、僕はその場を離れる。

「吉井!!!後で殺してやる!!!」

なんて事を言うんだ島田さん!!!!!!

君は本当に女なのか!!!!!!

「仕方がないわね!!!!美春!!!勝負よ!!!!!!」

「お姉さま!!!美春の愛の一撃受け止めてください!!!!!!」

相手がどんどん島田さんに近づいていく。

そして、

「「試^サ獣召喚!!!!!!」」

いよいよ、戦闘が始まった!!!!!!

第五話 Dクラス戦 その2

バカテスト 化学

問 以下の問いに答えなさい

【ベンゼンの化学式を書きなさい】

姫路瑞希・金沢豊の答え

『C 6 H 6』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン＋ゼン＝ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていますか。

吉井明久の答え

『B・E・N・Z・E・N』

教師のコメント

あとで土屋くんと一緒に職員室に来るように。

西崎瑠美の答え

『アンチクロロベンゼン』

渡辺直貴の答え

『パラジクロロベンゼン』

教師のコメント

なぜ、二人ともボーカ○○○○の鏡音○○と○○○レンの曲を書いているのですか？

まあ、確かにあの曲はとてつもなくいいですが。

特に『この歌に意味はあるの？この歌に意味はないよ。この歌に罪はあるの？この歌に罪はないよ。あの歌に意味はあるの？あの歌に意味はないよ。あの歌に罪はあるの？あの歌の罪は……』と、『ベンゼンに意味はあるの？ベンゼンに意味はないよ。ベンゼンに罪はあるの？この歌の意味は……ベンゼン』という歌詞はいいですね。

西崎瑠美・渡辺直貴のコメント

なんで、先生がそんなにしってんですか！？

Side 明久

「――――試^{サモン}獣召喚！……！！！！」

呼び声に応えて、二人の足元に幾何学的な魔方陣が現れる。

教師の立会いの下にシステムが起動した証だ。そして、姿を見せる召喚獣。

島田さんの召喚獣は、軍服姿で手にサーベルを持っている。後は全て島田さんそっくり。ただし、身長は80センチ程度だ。

その姿を一言で表現するなら、『デフォルメされた島田美波』ってところ。

相手の方も同様にデフォルメされた自分の分身を従えている。向こうの獲物は普通の剣みただけだ。

「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待っていました……………」

「ちょっと！いい加減ウチのことは諦めてよ！」

いよいよ戦闘が始まるんだな。そう思うと、自分のことじゃないのに全身に震えが走る。

ん？お姉さま？

「島田さん、お姉さまって————」

「嫌です！お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです！」

「来ないで！ウチは普通に男が好きなの！」

「嘘です！お姉さまは美春のことを愛しているはずですよ！」

「このわからずや！」

……………ついていけないや……………。

「行きます！お姉さま！」

二人の召喚獣の距離が詰まる。いよいよ戦闘だ。

「はああああああっ！！！」

「やああああああっ！！！」

それぞれの召喚獣が武器を構えて正面からぶつかり合い、力比べが始まった。

「こ————のっ！！！」

「負けません！！！！」

島田さんじゃなくて、瑠美だったら一気に勝つな。これ。

そして、二人の召喚獣の頭上には参考として二人の戦闘力（点数）が浮かび上がっていた。

Fクラス 島田美波 化学
53点

V S

Dクラス 清水美春 化学
94点

「島田さん!!!! サバ読んだの!?! 本当は60点にすら届いてないじゃん!!!!!!」

「数学以外は無理イーーーーー!!!!!!」

「ここまでですっ!」

「しまった!!」

ついに、島田さんの召喚獣が清水さんの召喚獣に力負けした。そのままの勢いで島田さんの召喚獣が押し倒される。

「さ、お姉さま。勝負はつきましたね?」

刀を喉元に突きつけられる島田さんの召喚獣。これがやられたら即死だな。

「い、嫌あっ! 補修室は嫌あっ!!!!」

島田さんが取り乱す。僕も補修室は嫌だよ。

「補修室?.....フフッ」

清水さんが島田さんの手を引っ張る。

あれ？清水さん？そっちにあるのは保健室ですよ？

「ふふっ。お姉さま、この時間ならベッドは空いていますからね」

「よ、吉井！早くフォローを！なんだか今のウチは補修室行きより危険な状況にいる気がするの！」

うん。僕から見てもそんな気がするよ。

でもね、島田さん……

「殺します……。美春とお姉さまの邪魔をする人は、全員殺します……」

ごめん、僕にソコに飛び込む勇気はない。

「さらばだ島田さん！！！！君のことは忘れない！！！！」

「ああっ！！吉井！！なんで戦う前から別れの台詞を！？」

「邪魔物は殺します！！！！」

ヤバイ！！！！清水さんの召喚獣がこちらにやって来た！！！！

僕も補修室は嫌だ！！！！！！！！！！

「殺すことができるなら、殺ってみろよ！！！！」

「誰ですか！！！！！！」

すると、僕の後ろからそんな声が聞こえた。

振り返ると、

「え！？豊！？」

「ヒーローは遅れて参上っていうことだぜ！！布施先生！！Fクラス金沢豊、行きます！！！！試獣^{サモン}召喚！！！！！！！！」

豊はすぐに、召喚を行い清水さんの召喚獣の前に立ちはだかった。

「だ、誰ですかあなた！！見たことない人ですけど！！」

「俺は金沢豊！！そこにいる島田美波の……………」

その次の瞬間、豊はとんでもない爆弾発言をした。

「彼氏だ！！！！！！」

「「「「はああああ！！」」」」

ここにいる、全員の声が重なった。ちなみに島田さんは顔を真っ赤にしている。

「なっ！？こんな男とお姉さまが！？許しません！！！！殺します！！！！！！」

「やれるもんなら、やってみな！！！！ただし——」

そして、豊の点数が頭上に浮かび上がる。

「この点数に勝てるならな！！！！」

Dクラス 清水美春

化学 41点

V S

Fクラス 金沢豊

化学 441点

「ええええええええええ!!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

「またもや、全員の声が重なる。というか、豊ってこんなに頭がよかったの!？」

「そ、そんなっ！！！！」

「ぶっ飛びな……！ エクスプロードバレット……！」

ちなみに豊の召喚獣は、マントに袖無しTシャツに半ズボンにサン
グラスに拳銃という装備。

その拳銃から大爆発てきなものが起こり、清水さんの召喚獣が一撃で戦死になった。

「これは、俺の召喚獣の特殊効果でな。俺がいった技をだしてくれるんだぜ」

つ、強すぎる……！！！！！！

でも、豊がなんでここに？

だって、本当なら豊は回復試験を受けているはずなのに。

「さてと。おい、てつじ——西村先生！この負け犬を補修室に連れていってくれ！」

案外、豊もひどいこと言うんだね。

「おお、清水か。たっぷり勉強づけにしてやるぞ。こっちにこい」
「お、お姉さま――！ 美春は認めませんからね――！ そんな害虫と付き合っているなんて――！ つか絶対、美春のものにしますからね――！
――！！！！」

「島田、落ち着け！！！吉井隊長は味方だぞ！！」

須川くんが、島田さんを羽交い締めに行っている間、僕は倒れている豊のもとへ行く。

「豊？生きてる？」

「ああ……………、なんとか……………」

なんとか、痛みをこらえて豊は立ち上がった。

「くっ！！まだ生きていたのね豊！！！！こうなったら吉井と一緒に殺してやる！！！！須川！！放しなさい！！！！」

「須川！！！！早く連れて行ってくれ！！！！その禍々しい視線だけで殺されそうだ！！！！」

「ちよつと、放し————殺してやるんだからあ————っ！！！！！！！！」

物騒な捨て台詞を残し、島田さんは須川くんの本陣に連れていかれた。

「そういえば豊。なんで豊はここにいるの？」

「あ？ああ。あの木下とかいうやつに今の現状を聞いたんだ。そして、けっこう押されてると聞いてな。とりあえず先生に許可をもらい、三教科だけ受けてこっちに来たんだ」

「ふん」

でも、その三教科がフィールドに出てこなかったらおしまいだよな。今のフィールドは化学。

ということは、豊は化学を受けたことになる。

第五話 Dクラス戦 その2 (後書き)

次回でDクラス戦完結です(できるといいな)。

第六話 Dクラス戦 その3 (前書き)

今回、オリキャラがでます。

やっと、直貴達の召喚獣がだせた〜 (ホッ♪

第六話 Dクラス戦 その3

バカテスト 英語

問 以下の英文を訳しなさい

『This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.』

姫路瑞希・西崎瑠美・金沢豊の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。後、久しぶりに西崎さんの真面目な解答を見て先生はほっとしています。

土屋康太の答え

『これは

』

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

『☆●◆▽」♪*×

』

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

渡辺直貴の答え

『これは瑠美が壊していた本棚です』

教師のコメント

西崎さんはいったい何をやらかしたのでしょうか？

Side 豊

「おっしやあ、お前ら！！俺の他に後三人の優秀生徒が来るから、それまでに持ちこたえろ！！！！！」

『『『おおおおおおおおおお！！！！！！』』』

現在、俺が加わったため運はFクラスの方に向いている。

俺の登場で、Dクラスの奴らは『え？金沢豊なんてやついたっけ？』という顔をした。

まあ、全員補修室送りにしたが。

『Fクラスの方に、なんか知らない生徒がいるぞ！！』

『所詮はFクラスだ！！！！たおせええええ！！！！！！』

『おおおおおおおお！！！！』

『Dクラスが攻めてくるぞ！！』

『Fクラス覚悟！！』

「その勝負は俺が受けるぜ！！！！金沢豊！！いくぜ！！！！試獣^{サモン}召喚！！！！」

Dクラス モブ男A

化学 90点

Dクラス モブ男B
化学 95点

Dクラス 女子A
化学 104点

Dクラス 女子B
化学 102点

V S

Fクラス 金沢豊
化学 438点

「弱いぜ!!! ブレイズバレット!!!!!!」

俺の召喚獣が拳銃を持ちながら、敵四体の真下に炎の火柱を出した。
四体全員直撃したため戦死。
補修室で頑張って勉強してこい!!!!

「さあ、次は誰だ!!」

『くそっ!!! 長谷川先生はまだか!!!』

『まだだ!!! それまで持ちこたえてくれ!!!』

『さすがに無理だ!!!』

長谷川先生?

って、なんの科目だったけ?

「おい。明久……………っていねえ!?!」

あいつどこいったんだよ!!

「吉井隊長なら、トイレ!!とかいってトイレに行ったぞ」

「何やってんだあいつはああああああ!! まあ、後でぶちのめすか。おい須川。長谷川先生ってなんの科目だ?」

「長谷川先生? 確か数学だったな」

数学だと!?

『長谷川先生が来たぞー!!!!』

『Dクラスの奴らは数学で勝負するみたいだ!!』

『長谷川先生!! お願いします!!』

「ヤバイ!! 全員撤退!!!! 俺、数学受けてないから0点なんだ!!!!」

『『『なんですとおおお!!!!!!!!』』』

『数学なら勝てるぞ!!!! 全員突撃!!!!』

『『『おおおおおおおおおお!!!!!!!!』』』

「くそっ!! 数学の点数があるやつは前に出て防御している!! ないやつは撤収!!」

「よし!! 金沢!! ここは俺に任せろ!!!!」

「須川!! よし、頼んだ!!!!」

「長谷川先生!! Fクラス須川亮いきます!! 試獣^{サモン}召喚!!!!」

Fクラス 須川亮

数学 89点

V S

Dクラス モブ男C

数学 105点

Dクラス モブ男D
数学 110点

「駄目だったあああああ……！！！！！！」

「須川……！！！！！！」

全然駄目じゃねえかよ！！

須川がとどめをさされそうになったその時！！

「どりゃあああああああ……！！！！！！」

なぜか、敵の後ろから明久の召喚獣が飛んできた。
もちろん、敵二体に直撃した。

Fクラス 須川亮
数学 10点

V S

Dクラス モブ男C
数学 85点

Dクラス モブ男D
数学 90点

「明久！？なんでお前！？」

「ちょ……！直貴……！！なんで投げ飛ばすのさ……！！」

「何をいつているんだ明久!!!! 須川がピンチだったからお前の召喚獣を投げ飛ばして、須川をピンチから救えたんじゃないか!!!」
「その割には投げ飛ばす瞬間、『死んでこい明久!!!』と言ったのは僕の気のせいかな!?!」

「豊!!!! 助けにきたぞ!!!!」

「スルーされた!!!!」

「直貴!?! お前、回復試験を受けていたんじゃない?」

「学園2位の実力をなめるなよ!!! Fクラス渡辺直貴!!! ここにいるDクラス生徒、全員に数学で勝負する!!!!!! 試験召喚^{サモン}!!!!!!」

Dクラス ここにいる生徒

数学 平均90×15

V S

Fクラス 渡辺直貴

数学 482点

『な、なんだあの点数!?!』

『渡辺直貴ですって!?!』

『ちよっと待てよ!!! なんで学園2位のやつがFクラスにいるんだよ!?!』

「いくぜ!!!!!! 月破翔烈破^{げっぱしょうれっぱ}!!!!!!」

直貴の召喚獣が剣を降り下ろした瞬間、そこから衝撃波が出てきて敵を全て戦死にした。

「いっちょ、あがり!!!」

「直貴!! お前が来たということは姫路達も!?!」

「いや! 瑞希と瑠美はまだ回復試験を受けている!! しかし、瑠美はもう少しで全教科終わるぞ!! ああ見えて、学園1位の座を持っているからな!!」

「分かった!! よし!! お前ら逝くぜ!!」

『『『おおおおおおおおおおおお!!』』』

Side 瑠美

「高橋先生!! 西崎瑠美、全教科終了しました!!」

「はい。西崎さんはもう戦争に参加しても大丈夫ですよ」

「ありがとうございます!!」

現在、やっと回復試験を終わらせた。

ちなみに、豊は化学と保健体育を受けて戦争に参加。

直貴は現代国語以外全て受けて戦争に参加しにいった。

私と瑞希は全教科受けろと言われていたので、遅く参加することになった。

「姫路瑞希!! 終了しました!!」

「お疲れ様です。これで姫路さんも戦争に参加しても大丈夫ですよ」

「はい!!!!」

「瑞希!! 行ける?」

「はい!! 行きましょう瑠美ちゃん!!」

「OK!! 行くよ!!」

Dクラス代表!!

覚悟しなさい!!

姫路瑞希・西崎瑠美、Dクラスに移動開始!!

Side 明久

「くそっ!! いくらなんでも教師を交換しすぎだろ!!!!」

現在のフィールドは現代国語。

Dクラスが数学では勝てないと思いつき、現代国語にしたらしい。しかも、直貴と豊はどちらも現代国語を受けていなかったらしく現在戦争に参加できない。

つまり、僕たちはピンチの状態だということだ。

「Dクラス!! 荒恵里菜が現代国語で勝負します!! 試獣召喚!!」
「!!」

「くそっ!! Fクラス田中がいく!! 試獣召喚!!」

Dクラス 荒恵里菜 あらえりな

現代国語 118点

V S

Fクラス 田中明

現代国語 67点

「Fクラス須川亮参戦します!! 試獣召喚!!!!」

「Dクラス初瀬川桃子も参戦します!! 試獣召喚!!!!」

Dクラス 荒恵里菜

現代国語 118点

Dクラス 初瀬川桃子
はせがわももこ
現代国語 116点

V S

Fクラス田中明
現代国語 67点

Fクラス 須川亮
現代国語 84点

「くそっ!!まだか!!!」

「ていうか、坂本達は!?!」「いた!!!雄二!!!」

「明久!!!もう少し持ちこたえろ!!!」

「そんなこと言われたって!!!!」

『戦死したものは補修!!!!!!』

「田中と須川がやられたぞ!!!!!!」

どうする!?!どうする!?!

「下校している生徒にうまく紛れ込め!!!!」

後ろから雄二の声が聞こえる。
どうやら、もう放課後のようだ。

「おい。明久」

「なに?直貴」

「あれって、Dクラス代表じゃないか？」

直貴がDクラス本隊の一番後ろを指さす。

見ると、下校している生徒に紛れているDクラス代表の平賀くんがいた。

よしっ！！

「直貴！！豊！！瑠美と姫路さんが間に合わないなら、僕達で平賀くんを倒そう！！」 「でも、科目はどうするんだ？」

「大丈夫。布施先生！！こっちに來てください！！」

先ほどの戦いで、ちょうど近くにいた布施先生を呼んだ。
現代国語が無理なら化学で勝負するよ！！

「なるほどな。現国じゃなく化学で勝負するということか」

「そういうこと！！行こう！！二人とも！！！！」

「おう！！」

「明久達のカバーをしろ！！！！」

雄二も気づいたらしく、みんなに僕達のサポートをするように呼びかけた。

「Dクラス突撃です！！」

その声を聞いて、Dクラスの本隊の隊長、荒さんが突撃指令をだす。
僕たちはそのすきに平賀くんのもとへと移動する。

しかし、

「行かせはしないよ！！Dクラス初瀬川桃子！！試獣^{サモン}召喚！！」

いつの間にか僕達の前にいた初瀬川さんが行く手をはさんだ。

「明久達の邪魔をするではない！！木下秀吉！！試獣^{サモン}召喚じゃ！！」

しかし、秀吉がそれを遮る。

「行くのじゃ明久！！！！」

「ありがとう秀吉！！」

みんながサポートをしてくれているお陰で、平賀くんの近くに来た。
よし！！気付いてない！！

「今だ！！布施先生！！Fクラス吉井明久が！！」

「Fクラス渡辺直貴が！！」

「Fクラス金沢豊が！！」

「「「Dクラス代表！！平賀源二に——「そうはいかない！！Dクラス玉野美紀！！試獣^{サモン}召喚！！」なっ！！？」」」

なんだと！？

近衛部隊！？

「いっとくけど、玉野だけではないぞ！！Dクラス渡辺佑樹！！試獣^{サモン}召喚！！」

「同じくDクラス！！南谷愛里！！試獣^{サモン}召喚！！」

Fクラス 吉井明久

化学 45点

Fクラス 渡辺直貴
化学 456点

Fクラス 金沢豊
化学 356点

V S

Dクラス 玉野美紀
化学 96点

Dクラス わたなべ ゆうき 渡辺佑樹
化学 410点

Dクラス みなみ やあいいり 南谷愛里化学 123点

って、ちょっとまってよ!!
Dクラスなのに、一人だけAクラスレベルがいるよ!?
ん?

渡辺? まさか!?

「くそっ!! 佑樹!! やっぱり近接部隊にいたか!!」
「化学を選んだのが間違いだったね兄ちゃん!!!!!!」
「兄ちゃん!?!」

僕と豊の声が重なる。

「ああ。そこにいる渡辺佑樹は俺の双子の弟だ!!」
「「ええええええ!!?!」」

直貴って、双子だったの!?

そういえば、雰囲気は何となく似てる!!

しかも、直貴の弟だから兄が得意な科目は弟も得意なのか!!

「残念だったな!! Fクラスの三人!!」

「平賀くん!!」 「一瞬、Aクラスレベルが二人いるということに
は焦ったが、所詮はその程度だ!! 諦めな!!」

「……確かに、今の状況では僕達は勝てない……」

「ああ、だから。こいつらに託すしかないんだよな……」

「後は頼んだぞ。姫路、西崎」

「「「はっ?」」」

一瞬、Dクラスの四人が『何を言っているんだこいつらは?』という表情になる。

すると、平賀くんの後ろから我らが切り札、姫路さんと瑠美が現れた。

「あ、どうも……」

「えへへ……♪」

「あれ? どうしたの姫路さんに西崎さん。Aクラスの人達はここを通らないはずだけど……」

「あ、いえ。そうじゃなくて……」

「あゝもう!! めんどいな〜!! 瑞希いくよ!! Fクラス西崎
瑠美!!」

「え!?! あ、Fクラス姫路瑞希が」

「「Dクラス代表!! 平賀源二に化学で勝負するよ(します)!!」

!!」

「えっ?」

「試験召喚獣召喚!! 試験召喚!!」

「試験召喚です!!」

「えっ？あ、試獣^{サモン}召喚……………」

あわてて、平賀くんが召喚獣を召喚する。
無理もないよね……………、だってこの二人……………

Fクラス 西崎瑠美

化学 518点

Fクラス 姫路瑞希

化学 316点

V S

Dクラス 平賀源二（代表）

化学 108点

どちらもAクラスレベルなんだから……………（一人は学園1位の實力
だけど……………）

「え、えっ？」

「ご、ごめんなさい！！！」

「じゃあね♪鷹爪^{たかづめもうじゅうげき}猛獣撃！！！！」

姫路さんの召喚獣は剣を降り下ろし攻撃して、最後は瑠美の召喚獣
が空中から蹴りを落として平賀くんの召喚獣を戦死させた。
そして

「戦争終結！！勝者はFクラスです！！」

布施先生の一言で、戦争はFクラスの勝利という結果になった。

第六話 Dクラス戦 その3（後書き）

誤字脱字があったら言ってください。

後、今日でたオリキャラ達は他の部分でも活躍します（特に佑樹と恵里菜と桃子は）

このオリキャラ達の紹介は、次回にやると思います。

それとも、次回が終わった後にしようかな？

第七話 僕と悪魔と生徒交換（前書き）

今回はバカテストはなしです。

あと、オリジナル要素がはいります。

第七話 僕と悪魔と生徒交換

Side 明久

Dクラス代表 平賀源二
討死

『うおおおおお!!!!』

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような音響が校舎内を駆け巡った。

「凄えよ!!! 本当にDクラスに勝てるなんて!」

「これで昼や卓袱台ともおさらばだな!」

「ああ。アレはDクラスの連中のものになるからな」

「坂本雄二サマサマだな!」

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな!!!」

「坂本も凄いけど、金沢と渡辺と西崎さんと姫路さんも凄いぜ!!!」

「金沢、渡辺、坂本万歳!!!!」

「姫路さん愛してます!!!」

「西崎さん結婚——ぐはっ!?!」

「ルミヲタブラカスナ……………」

やばっ!!!

また、直貴が魔王化した!!!!

「兄ちゃん!!!」

しかし、そこで弟佑樹の妨害がはいる。

「ジャマヲスルナユウキ!!」

「あ、そんなこと言うんだ？分かった。兄ちゃん秘密をみんなにバラ——」「すんません!!許して佑樹くん!!——!!」最初からそう言えばいいのに……。ってか抱きつくな——!!——!!僕にそんな趣味はない——!!——!!」

はつきり言うけど、もしかして佑樹ってドS？

「あー、まあ。なんだ。そう手放しで誉められると、なんつか」

ちなみに雄二は、頬をポリポリと掻きながら明後日の方向を見ていた。

照れているなんて意外だな。

「まさか、姫路さんと西崎さんと渡辺くんがFクラスだったなんて……」

すると僕の後ろから声が聞こえてきた。

振り向くとそこにはヨタヨタと歩み寄る平賀くんの姿があった？

「あ、その、さっきはすいません……」

「謝る必要なんてないわよ瑞希。これも勝負だしね」

「西崎さんのいうとおりだ。とにかく、ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日でいいか？」

これが、試召戦争で負けたクラスが受ける罰的なものだ。

負けたクラスは三ヶ月試召戦争を行使できない。

しかも、僕達のクラスに負けたため僕達の教室の設備と交換しなければならぬ。

ずっと、あの設備のままって嫌だよね。

「もちろん明日で良いよね、雄二？」

「いや、その必要はない」

「え？なんで？」

「Dクラスを奪う気はないからだ」

「で、でも……」

「おいおい明久。忘れたのか？俺達の目標がAクラスだということを」

「でもそれなら、なんで標的をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」

「少しは自分で考えろ。そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

「なっ！そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ！！」

「違うぜ雄二。明久は近所の小学生に言われたんだ」

「そうなのか？明久……」

「……………人違いです」

「「まさか……………本当に言われたことがあるのか……………」？」

み、見ないで！！そんな目で僕を見ないで！！

「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない。しかし、条件がある」

「条件？どんなのだ？」

「条件は二つだ。一つめは、俺が指示を出したら、窓のそとにあるアレを動かなくしてもらいたい」

雄二が指したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。

でも、この室外機はDクラスのものじゃない。ちょっと貧しい普通の高校レベルの設備でしかないDクラスにエアコンなんて物はないん

だから。

「Bクラスの室外機か。まあ、設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、平気だろ。んで、二つ目は？」

「話が早くて助かるな。二つ目の条件は生徒の交換だ」

「生徒の交換？」

「ああ。今から俺がDクラスにいるある四人を指名する。その四人は明日からFクラスとなる。そして、その四人がFクラスとなるため、こちらからも四人いってもらいたいところだが、人数の関係があるため、二人だけDクラスにいてもらう」

「まあ、いいだろ。それで、誰を選ぶんだ？」

「なに。もう決まってるさ。渡辺佑樹、荒恵里菜、初瀬川桃子、南谷愛里をFクラスに貰おう」

「分かった。佑樹、荒さん、初瀬川さん、南谷さんは前へ」

「さて。明日からお前らはFクラスだが、なにか言いたいことはあるか？」

「特にないです。それに、Fクラスでも僕は平気です」

「私も」

「同じく」

「全然大丈夫よ」

「よし。これからよろしく頼むぞ。んで、こちらからの二人は明日のお楽しみだ」

「分かった。ちなみに、なんで室外機を壊すんだ？」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな。タイミングについては、後日詳しく話す。今日はもういいぞ」

「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ」

「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思っっているだろう？」

「それはそうだ。AクラスにFクラスが勝てるわけがない。ま、社交辞令だな。あ、後、うちのクラスの四人をよろしく頼むぞ」

そして、平賀くんは、じゃあ、とてをあげて去っていった。

「さて、お前ら！！今日はご苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆつくりと休んでくれ！と、その前に。Dクラスからきた新しいメンバーの自己紹介でもしてもらうか。じゃあ、渡辺（弟）のほうからいくか」

「分かりました。渡辺直貴の双子の弟、渡辺佑樹です。明日からよろしく願います」

こうしてみると、直貴より佑樹の方が礼儀正しいね。

「荒恵里菜です。秀吉くんと同じく演劇部に所属しています。よろしく願います」 「初瀬川桃子です。美術部に所属しています。明日からよろしく願います」

「南谷愛里です。部活には入っていませんが、ピアノをやっています。よろしく願いますね♪」

『おい。めっちゃ可愛い女子が三人入ってきたぞ』

『教室がまた華やかになったな！！』

『生徒交換なんて、坂本はほんとに凄いや！』

可愛い女子が三人も入ってきたので、Fクラスの男子どもは一斉に喜びあった。

「よし。ちなみにDクラスへ行くのは柴崎と田中だ。なにか文句ある奴は、直貴がボコボコにするがあるか？」

『全然ないです！！！！』

「じゃあ、解散！」

皆雑談を交えながら自分のクラスへと向かい始めた。

ちなみに、直貴と豊は佑樹と瑠美は女子三人と雑談している。

「雄二、直貴、豊。僕らも帰ろうよ」

「そうだな」

「分かった。あ、佑樹も一緒に帰るからな」

「さっさと帰るか」

「あ、あのっ、坂本くん」

「ん？」

帰ろうとしているところを、姫路さんに呼び止められた（雄二が）。

「お、姫路。どうした？」

「実は、坂本くんに聞きたいことがあるんです」

「おう。分かった」

そうこたえると、雄二は姫路さんと一緒に僕から少し離れたところで話を始めた。

……………なに、はなしてんだろう？

姫路さんは真剣に雄二の顔を見ていた。

凄く集中しているように見える。

ん？もしかして……僕は存在を認識されていない？まさか、眼中にないとか？ちくしょう！それだったら――スカート捲り放題じゃないか！！

『チャンスだぜ明久。パパッと捲っちまえよ。あんな可愛いこのスカートの中なんて、そうそう拝めるもんじゃねえぜ？』

はっ！？お前は僕のなかの悪魔！？くそっ！僕を悪の道に誘惑してきたな！舐めるなよ！僕の正義の心が負けるものか！

……………。

.....。

...

.....あれ？天使は？僕のなかの天使は！？ちよつと、出てきてよ！！これじゃ僕には悪の心しかないみたいじゃないか！！

「ま、元々興味があったが、きっかけはコイツがそんな相談をしてきたってことだ」

僕が自分と戦っていると、いつの間にか二人がこちらに歩いてきていた。

「あの、吉井くんがそんなことを言い出した理由って.....」

どんどん、二人の会話は続いていく。

「さて。そう言えば、振り分け試験で何かあったみたいだが、それと関係があるかもしれないな。バカにはバカなりに譲れないものがあつた、ってことだろ」

いったい、なにを話しているんだろう。

まさか、愛の告白！？

姫路さんは雄二が好きだったの！？

そうなると、なんかショックだよ.....。

胸のあたりがモヤモヤするや。

「おい明久？大丈夫か？」

「え？あ、直貴。大丈夫だよ」

「雄二たち、話が終わったみたいだぜ。帰ろうぜ」

「あ、うん。そうだね」

「瑞希!!! 帰るよ!!!」

「あ、瑠美ちゃん!!! ちょっと待っててくれませんか?」

「分かった。じゃあ、荒さん達と一緒に玄関でまってるね!!!」

向こうも向こうで、帰るらしい。

「じゃ、俺達もいくか」

「そうだな」

「姫路さん!!! また明日ね!!!」

「はい!!! また明日!!!」

やっぱり、まだモヤモヤが消えないや……。

もしかして、僕………。

まあいつか、さあ帰ろう。

ていうか、天使がでてこな———

『捲ってもいいんじゃない?』

遅いよ出てくるの!!!! 僕のなかの天使!!!!

しかも、肯定してるし!!!!

第七話 僕と悪魔と生徒交換（後書き）

次回はオリキャラ紹介 part 2です。

オリキャラ紹介 p a r t 2 (前書き)

訂正番です

オリキャラ紹介 part 2

渡辺 佑樹 （わたなべゆうき）

身長 直貴より5?小さい

体重 直貴より5?痩せてる

見た目 テイルズオブエクシリアのジュード

髪の色、目の色は直貴と同じ

趣味 昼寝 機械いじり

特技 格闘技 陸上 料理

得意科目 化学 日本史 英語 家庭

苦手科目 数学 現代国語 古典

詳細 直貴の双子の弟で、Dクラスの生徒。

雄二の条件にのっとり、Fクラスの生徒となる。

直貴は剣道が得意だが、佑樹は柔道や空手が得意。

見た目はそんな似てないが、雰囲気は似ている。

例えば、得意科目がほぼ同じとか、行動が同じとか。

似てないところは、直貴は機械音痴なのに佑樹は機械いじりが好きとか、直貴より佑樹の方が礼儀正しいとか。はつきりいって、弟の方が評判がいいかもしれない……………。

ちなみに直貴に双子の弟がいると知っていたのは、瑠美だけである。兄の鈍感さには呆れていて、いつか、瑠美と直貴をくっつけなくちゃと思っており、ちよくちよく瑠美にアドバイスしている。

本人いわく、『瑠美さんのような美人の女性をお姉さんと早く呼びたいです!!!!』らしい。

得意科目のなかで、一番得意な化学はAクラス並の成績をもつ。

しかし、学園2位の实力を持つ兄がいるお陰で、次第にすべて（現代国語以外）の科目がAクラス並の成績を持つようになる。

苦手科目のなかで、一番苦手な教科は現代国語。

直貴の得意な科目でもあるため、直貴はめっちゃくちゃ勉強させているらしい。

召喚獣はテイルズオブエクシリアのジュードのミニ版。

格闘技をうまく使い、敵をノックダウンしていく。

瑠美とはちよつと違う技を使う。

腕輪は化学だけ使える。

色は黄緑

発動キーワードは『ドラグリーン』

消費点数は200点

発動した瞬間召喚獣が輝く竜となり、あたり一面大量の火の玉をばらまく。最後は光線のようなものを出してもとの姿に戻る。

ちなみにこのときだけ、自分は竜から出る特殊な光で観察処分者となる。

荒 恵里菜 （あらえりな）

身長 156？

体重 44？

胸はCカップ

見た目 鈴宮ハルヒに出てくるキョンの妹

髪の色は青

目の色は緑

趣味 読書 音楽を聞く

特技 演劇

得意科目 現代国語 古典 英語

苦手科目 化学 数学 物理

詳細 演劇部に所属している、Dクラスの生徒。

佑樹と同じく、雄二の条件にのっとり、Fクラスの生徒となる。

演劇部に所属しており、秀吉とは知り合いである。そのため、秀吉に恋心をだいている。

見た目はキョンの妹に似てるが、性格は心優しい少女。

困っている人はほっとけない。ちなみに、少々天然ボケのところがある。

得意科目の中で一番得意なのは現代国語。

後にAクラスレベルの成績になる予定。

苦手科目は化学。本人いわく『実験嫌い』という理由だけで苦手らしい。

過去に実験で失敗して大変なめにあつたとか。

召喚獣はロッドに白いローブにティアラという僧侶っぽい装備。

ちなみに、恵里菜はのりきではないがたまに技名を言っている。

（なぜ、技名を言って点数がひかれないかというと、瑠美が学園長と無理矢理召喚獣の特殊効果としていれたから。技名を言うのは人それぞれである）

腕輪は現代国語だけ使える。

色は赤。

発動キーワードは『不死鳥』
フェニックス

使うと現在の点数からいっきに1点になる。

自分の召喚獣が不死鳥となり、敵を一撃で戦死させる。

ちなみに、恵里菜がこの腕輪を使うのはAクラス戦以降なので、ま

だ使わない。

初瀬川 桃子 （はせがわももこ）

身長 156？

体重 45？

胸はCカップ

見た目 ポニーテールでピンク色の髪
垂れ目で、色は赤

趣味 読書 絵を描く

特技 特にないですby桃子

得意科目 英語 現代国語 家庭

苦手科目 数学 化学 日本史 物理

詳細 美術部に所属しているDクラスの生徒。雄二の条件でFクラス
の生徒となる。

絵を描くのが好きで、いつもスケッチブックを持ち歩いている。
若干ボケのところがあ性格。ドジッコでもあり、あらゆるところ
で転びまくる。

自分では気を付けているらしいが……………。

得意科目で一番得意なのは、英語。成績はBクラスレベル。

苦手科目のなかで一番苦手なのは、日本史。日本史だけはFクラス
レベルである。

召喚獣はスケッチブックにペンにベレー帽に学生服。
スケッチブックに書いた絵は本物となり攻撃する。

案外描くスピードは早い。
腕輪はなし。

南谷 愛里 （みなみやあいり）

身長 158？

体重 絶対言わない！！b v愛里

見た目 二つ結びをしていて黒髪。目の色は茶色。胸はCカップ

趣味 暇なときはいつでもピアノを弾く

特技 ピアノ 作曲や作詞

得意科目 日本史 数学 物理 家庭

苦手科目 古典 現代国語 保健体育

詳細明るくりーダースhipをもっているDクラスの生徒。

雄二の条件にのっとり、Fクラスの生徒となる。

性格に会わないが、ピアノで有名。作詞、作曲もしたことがあり、そのピアノの实力はコンクールで最優秀賞をとるほど。

得意科目で一番得意なのは日本史。实力はBクラスレベルである。

苦手科目のなかで一番苦手なのは保健体育。運動の方は得意なのだが、保健が苦手。

いわゆる、変態が苦手。

召喚獣はキーボードに音符の髪飾りに白のワンピース。キーボードから音を出して攻撃する。

弾くはやさによって、召喚獣の動きが変わる。

腕輪はなし。

第八話 僕と恐怖とお弁当（前書き）

今回の内容は……………、タイトルを見ただけでわかります
よね？（笑）

第八話 僕と恐怖とお弁当

Side 瑠美

現在、瑞希の家にいます!!
なぜかって?

瑞希が料理を教えてほしいと言ったから特訓中なんだよ。
んで、現在は瑞希がこれなら作れると言ったシュークリームを作っ
てもらっているの♪もちろん一人で。
え?

不安じゃないのかって?

そりゃあ.....

.....、

「あ!これを入れたら、もっと甘くなりそうです!!さっそく……
「ストップ!!瑞希!!それは、青酸カリ!!そんなのいれたら、
私、死んじゃうよ!!!!というか、なんで青酸カリが置いてあるの
!?!」わ、分かりました……」

めちゃくちゃ不安に決まってるじゃあああああああああ
!!!!!!!!!!!!!!

今の見た!?!見たでしょ!?!

あのこ、私のこと殺すき!?!

というか、まじでなんで青酸カリが置いてあるの!?!

で、数分後

「できましたよ!! 瑠美ちゃん!!」

シュークリームが完成した。
うん。見た目は悪くないね。

「じゃあ。いただきます」

「…………… (ドキドキ)」

パクッ

「あ、意外においしい——辛!？」

辛!!

な、なにこれ!?

な、なんでシューはいいのにクリームは辛い!?

「瑠美ちゃん!? 大丈夫ですか!? はい、お水です!!」

「…………… (ゴクゴクゴクゴク) プハア。生き返った……………」
瑞希。いったい私に谁的恨みが……………」

「え!?! 私は別に瑠美ちゃんに恨みなんかありませんよ!?!」

じゃあ。なんでこんなに辛いのか……………」

チラッと台所を見ると…………… なんか、使う必要が全くないタバスコがクリームを作るときの鍋の近くに置いてあった……………
……………」

「これだあああああああああ!!!!!!」

「え!?!」

「瑞希!! あんた、バニラエッセンスと間違えてタバスコ入れたでしょ!?!」

「えー!? 私、タバスコをいれたんですか!?!」

「だって、このクリームめちゃくちゃ辛いんだもん!! 明らかに台所に置いてある、タバスコが原因だよ!?!」

「そ、そんな!?! ご、ごめんなさい溜美ちゃん!?!」

「まったく……………。こんなじゃ、お昼のお弁当作れないじゃない……………」

「そ、そんな(泣)」

「やっぱ。私がいなくちゃ、駄目だね……。さて、瑞希。明日みんなに食べてもらえるよう、もう作っちゃうよ」

「え? もうですか?」

「うん。おかずのいとかは私と共同作業。デザートは瑞希に任せるよ」

「え? デザートは私に作らせてくれるんですか?」

「デザートぐらいは大丈夫でしょう? あ、どうせならおかずのい何品かは一人で作ってもらうか。もちろん、やるよね?」

「はい!?!」

「じゃあ、メニューはこんな感じで……………」

ワイワイガヤガヤ

二人で明日みんなに食べてもらう、お弁当のメニューを考えて、料理を作って(途中、事件がおこったけど)、きれいに箱につめてその日は終了した。

でも、このときは後悔した。

あんなことを頼まなければと……………。

次の日のお昼時間

Side 明久

「さて、昼飯でも食いにいくか」

「そうだね。今日こそ、おごってね」

「おいおい明久。なに学食に行こうとしてんだ？」

「え？直貴は行かないの？」

「違う。そういう意味じゃない。今日は瑠美達がお弁当をつくってきてくれたんだぞ」

「そういえば、そんな約束をしていたな」

「頑張って二人で作ったんだからね♪」

「絶対おいしくできたはずです!!」

「（だと、いいんだがな……………）」

「どうした直貴？顔が真っ青だぜ？」

「い、いや、なんでもない……………」

「では、こんなところではなく屋上にいくとしようかの」

「それはいいな。じゃあ、みんな屋上に行ってくれ。俺は飲み物を買いに行ってくる」

「あ！それならウチも行くわ!!」

みんなと話していると、もとDクラスメンバー四人がこっちに来了。

「あれ？兄ちゃん達、どこいくの？」

「お、佑樹。そうだ。お前らも一緒に屋上に行かないか？」

「え？なんで？」

「瑠美達がお弁当を作ってきてくれたんだ。一緒に食べないか？」

「ホント!? あ、でも、僕らのぶんってあるの？」

「あ、その事なら大丈夫だよ。けっこう多目に作ってきたから、佑樹達のぶんもあるよ」

「それなら。平気だね」

「私も一緒に行きます」

「私も!!」

「あたしもいただこうかな」

「じゃあ、けっこう多く飲み物を買ってこなくちゃな」

「あ、それなら私も買いに行きます」

「あたしも」

「恩に着る。じゃ、明久達は最初に行ってくれ、ちゃんと俺らのぶんを残しとけよ」

「うん。分かったよ」

こうして、雄二、島田さん、荒さん、南谷さんは飲み物を買に行き。僕、直貴、豊、ムツツリーニ、秀吉、瑠美、姫路さん、佑樹、初瀬川さんは先に屋上にいくことになった。

屋上

「さあ。さっそく食べようか!!」

「あ、そういえばシートも持ってきてあるんです。今、ひきますね」

「なんか、ピクニックみたいです」

「天気もいいからね」

姫路さんがシートをひいてくれたので僕たちはそこに座った。

真ん中には、本当に多目に作ったらしく、二段弁当が二つ置いてあった（しかも、めっちゃ豪華なお弁当箱）。

「じゃあ。開けるね♪」

そう言うと、瑠美は二つのお弁当箱の蓋を開けた。
なかを見ると……………、

「ダラダラダラ」

「あ、明久？よだれがすごいよ？」

凄い……………。

まず、片方のお弁当箱にはお稲荷さんとおにぎりという、主食類。もう片方には、卵焼きやタコさんウインナー、おひたしや、ミニハンバーグや、エビフライなどおかず類が揃っていた。しかも、きれいに詰めてあるからめっちゃくちゃ美味しそう。

「な、なんだこのうまそうな弁当は……………」

「やべえ……………、よだれがとまんねえ……………」

「……………（ダラダラダラ）」

「美味しそうじゃの〜（キラキラ）」

「凄い！！僕の好きなものがたくさんあるや！！」

「佑樹くん。落ち着いて。こんど、料理でも教えてもらおうかな？」

みんなも、認めるほど美味しそうなお弁当。

なんか、雄二達にちゃんと残しとかなくちゃ悪いね。ていうか、絶対右ストレートが飛んでくるな。

「さあ、食べようか♪」

「いっただきまーす！！（パクッ）」

「……………（パクッ）」

「あ、ずるいぞ土屋^{パクッ}」

まず、目にも止まらぬ速さで初瀬川さんがお稲荷さんを、ムツツリーニがエビフライを、豊が卵焼きを食べた。

「お、美味しい！！！！！！」

「ホントですか！！」

「良かった〜♪」

初瀬川さんは、美味しいとコメントを返したが、なぜか男子二人のコメントが返ってこない。
すると…………、

ボタン！！！！↑二人が倒れたおと

ブルブルブル↑倒れたまま体が震えてるおと

「キャアアアアア！？」

「ムツツリーニ！？豊！？どうしたの！？」

なぜか、二人とも倒れて、小刻みに震えだした。
しかし、二人はすぐに起き上がって、

「……………（グッ）」

「お、美味しいぞ。に、西崎、ひ、姫路……………」

ムツツリーニは親指をたて、豊は美味しいと返してくれた。
それなのに、なぜ、二人とも震えているのかな？

「あ、お口に会いました？良かったです♪」

「……………（サアーツ）」

姫路さんは喜んでいたが、瑠美は顔を真っ青にしていた。

「（直貴、佑樹、秀吉。今のどう思う？）」

「（どう思うと言われても……………」

「（わしはなぜ、豊とムツツリーニは倒れ、初瀬川が倒れていないのかと疑問がわいてくるのじゃ）」

「（多分、うんよく初瀬川は瑠美の作ったものを食べられたんだろ
うな。……………よし、明久）」

「（なに直貴？）」

「（俺は主食しか食わない。おかずはお前に任せた）」

「（嫌だよ！！！！あんなの見せられると、めっちゃくちゃ不安だよ！
！！！！）」

「（大丈夫だ。多分100%中25%は瑠美が作ったものだ。安心
しろ）」

「（そんなの安心できないよ！！！！！！）」

「（それなら、わしがいいのかな）」

「（駄目だ木下！！！！ここは明久の木製の胃袋を信じるんだ！！！！）」

「（もう、その時点で信じられないよ！！！！！！）」

「（大丈夫じゃ。わしの鉄の胃袋を信じるんじゃ）」

「（いや、ここは明久に任せるんだ！！！！！！）」

「（直貴！！きさま、僕を死に追いやるつもりだな！！！！！！）」

まあ、そんなこんなで言い争っていると、

「おい。飲み物買ってきたぞ」

「なんか、騒がしいですね」

「なにかあったのかしら？」

雄二と荒さんと南谷さんが登場。

あれ？島田さんがいない？

「お、うまそうな弁当だな（パクッ）」

「あ、雄二くんずるいです。私も（パクッ）」

「二人ともずるいわよ。あたしも（パクッ）」

「「「あっ……………」」」

ヤバイ！！！！雄二はともかく、荒さんと南谷さんが食べたものは！！！！

「あ、とても美味しいです！！」

「ほんと！！とても美味しいわ！！！！」

……………あれ？

もしかして、二人は瑠美が作ったものを食べたのかな？

……………ということは、

ボタン！！！！

ガタガタブルブル

手遅れだった。

「ちょ、坂本！？いったいどうしたのよ！？」

ここで島田さん登場。

ん？

視線を感じる。

チラッとみると、雄二が今言いたいことを目で僕に訴えていた。

「『毒をもっただろ』」

「『もってないよ。これが姫路さんの実力だよ』」

「『じゃあ、なんで荒と南谷は倒れてないんだ？』」

「『あの二人はうんよく、瑠美が作ったものを食べたみたいだよ』」

普段、役にたたないのがここで役に立つなんて。

「あ、足がつつてな……………」

そして、雄二は瑠美と姫路さんを悲しませないよう（おもに姫路さんを）嘘をついた。

「あはは、ダッシュで階段ののぼりおりしたからじゃないかな」

「うむ、そうじゃな」

「そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど」

事情のわかっていない島田さんが不思議そうな顔をする。

ちなみに、荒さんと初瀬川さんと南谷さんは、こっちをきにしないで主食を食べている。

「あー！なんか、主食もおかずも美味しそうね！！ウチも食べるわ！！」

え！？

ちょ、待つんだ！！島田さん！！そのタコさんウインナーは！！！！

「いっただきまーす！！（パクッ）」

「「「ああああああああああ！！！！！！」」」

「（ムシヤムシヤ）うん！！美味しいわ！！！！」

「ほんと！！良かった！！（瑞希が作ったものを食べなくて）」

あれ？

またもやセーフ？

なんで女子ばっかし！？

「ほら。明久達もはやく食べなくちゃ、なくなるよ」

「……………上手い（ムシヤムシヤ）」

姫路さんは凶器を作るのが上手なんだよ。

「あれ？7個しかありません。どうしましょう」

!!!!!!!!!!

い、嫌な予感が…………

「ちょうど、男子が7人いるから男子に食べてもらおうか♪」

「「「「「「なんだとおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」」」」」」

「「「」

「えゝ。私たちのぶんはゝ？」

「また、こんどね♪」

「仕方ありませんね」

「そうね」

「いいわねゝ。吉井達は」

全然よくないよ!!!!!!!!!!

「はい!!!!!!!!どうぞ!!!!明久くん!!!!」

すると、姫路さんになにかを渡された。

てをみると、カップゼリーみたいなものが僕の手のひらに置かれていた。

スプーンつきで。

他のメンバーもそんな状態だった。

「あ、ありがとう姫路さん……………」

どうする!?

「(ゆ、雄二どうしよう)」

「(しょうがねえ。死を覚悟して食べるぞ)」

「(めちゃくちゃ不安なのじゃが……………」

「……………(コクコク)」

「(俺はまだ死にたくない……………」

「(運命というものは残酷ですね……………」

「(よし。みんなで一斉に食べよう)」

豊の発言に全員うなずいた。

「いくぞ!!!!!!セーの!!!!!!」

「「「「「(パクっ!!!!!!ムシャムシャ)」「「「「「」

……………。

「「「「「!!!!!!」「「「「「」

ぐはっ!?

「「「「「ゴばあっ!!!!!!」「「「「「」

全員、食べた五秒後に命という儂い花が散った。

第八話 僕と恐怖とお弁当（後書き）

誤字脱字があつたら言ってください

次回はもしかしたら、オリ展開が入ります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5875x/>

バカとテストと召喚獣 ～バカと未来と過去とFクラス～

2011年11月17日19時02分発行